
異世界のうた

練馬治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界のうた

【Nコード】

N8853E

【作者名】

練馬治

【あらすじ】

理由も分からず、異世界に飛ばされてしまった俺。そんな俺に唯一残されていた物は、一つの音楽プレイヤー。——そして歌を歌うことだけだった。

「あつ。気付きましたか？」

「……………」

目が覚めて、俺が最初に見たのは、一人の見知らぬ少女の顔だった。

思考はまだぼんやりとしている。状況を確認してみると、目の前には少女がいて、俺はなぜかベットに寝かされていたのだ。

なぜ、見知らぬ少女が俺の介抱をしているのか。——よく分からない。

見た感じ、少女の歳は俺と同じくらいだ。少女は俺の額に乗せていたタオルを取り、あらかじめ桶に溜めておいた水でそれを絞る。

「あなたが近くの森で倒れていたので、急いで私の家に運んだのです。あの森には、夜になると凶暴な動物が出没しますので、さすがにあのままにしておくとは危険でしたので」

そう説明して、少女は濡れたタオルで俺の顔を丁寧に拭く。

森……？ おかしいな。俺が住んでいるのは、都会の真ん中にある普通の街だ。森なんて存在するはずがないし、そもそも危険な動物って一体どういう意味だ。

少女のエメラルドグリーンの目が、真っ直ぐに俺を見据えていた。——優しそうな目だ。まだ出会ったばかりの少女だが、警戒心を持つのは馬鹿馬鹿しいと思うてしまうくらいの、安心感のある目をしていた。彼女が嘘を言っているとは思えない。少女の髪は、目と同じエメラルドグリーンの色をしていた。少なくとも、この少女は日本人ではないことは明らかである。

「……………あの。あなたは？」

「私はフウル。あなたが倒れていた、森の近くにある村に住んでい

ます」

「むら？」

俺が質問をした直後、部屋のドアが開かれた。中に入ってきたのは、フウルという少女と同じ、エメラルドグリーンの髪と目をした一人の男性だった。

「おつ。ようやく目が覚めたようだね。『森で人が倒れている』と、フウルが慌てて家に駆け込んできた時は本当にびっくりしたけど、無事で何よりだ。見た感じケガもしてなさそうだね。これなら、すぐに元気になるさ。——フウル、介抱ごころうさま。夕食はテーブルに置いてあるから、早く食べておきなさい」

「大丈夫だよ、パパ。まだお腹減ってないから」

どうやら、髪と目からして、あの人がフウルの親父さんと言うわけか。

「そんなことより、パパの方は大丈夫なの？ 明日からスワンキー村との抗争に行かなくっちゃいけないんだし、今夜は早く休んだほうがいいよ」

「……いや。これから村の広場で、明日の作戦の最終確認をしなければいけないんだ。すまないな。フウル」

作戦会議？ スワンキー村との抗争？

不可思議な単語が、俺の頭を巡る。

そつえば気を失った前の記憶が、どうも曖昧になっている。音楽を聞きながら、適当に家の周りを散歩した所までは覚えているが、それ以降は記憶に霧がかかったように、よく思い出せないのだ。

ベットから体を起こし、今度はしっかりと周囲を観察してみる。

家は木造。必要最低限の家具しか見当たらず、どこか質素で貧乏な雰囲気を感じている。照明器具はベットの近くに置かれている一つのランプのみ。電気ではない。そもそも、この部屋には近代的な物が全く見当たらなかったのだ。

「あの、すいません。ここは一体どこですか？」

親子の会話に水を差すようで悪いと思ったが、ひとまず俺は質問

をしてみる。

答えたのは、フウルの親父さんだった。

「うん？　ここはピロー国の東端、トリップ村という所だよ。まあ、これといった観光名所や特産物もない、普通の村なだけだね」

「ピロー国？」

聞いたこともない国だった。

「あの、何かの間違いじゃないですか？　俺、さっきまで日本にいたんですよ。ジャパン。ここはジャパンという国じゃないんですか？」

「ニホン？　ジャパン？　何だねそれは。僕は記憶力に自信のあるほうだが、そんな地名は全く聞いたことないな。もしかして最近、新しく作られた村なのかい？」

俺の頭が、どんどん真っ白になっていくような気がした。

二人は一緒に目を丸くして、俺に視線を向けている。やはり、フウルの親父さんが嘘をついているとは思えない。――照明がランプ。日本という国を知らない。裏付けできる要素がこれだけあると、もう認めるしかなかった。

ここは日本ではない、ピロー国のトリップ村という所。

――俺はどこかも知らぬ、異世界へ飛ばされてしまったのだ。

俺がまだ元の世界にいた頃の話をする、ジュンという名前の、普通の高校生であった。家族関係や友人関係や成績とやら、これといったアクシデントもなく、いつも趣味の音楽を聞いたり歌ったりして日々を無難に過ごしていた高校生。

それが今や、右も左も分からない異世界へ、何の前触れもなく飛ばされてしまったのだ。

ショックを受けないはずがなかった。

「……………」

この家の住人が去った部屋。

俺はベツトに寝転がりながら、ぼんやりと窓の景色を眺める。外はすでに夜。もとの世界では滅多に見られなかった星が、夜空に潤いよく輝いている。だが、肝心の月がいくら探しても見当たらず、この世界は地球とは違う所にあることが嫌でも証明できる。

ちなみに、この世界には電気という物はないらしく、光源は全て火で賄っているらしい。窓から見てもいくつかの巨大な燭台を確認することができ、オレンジ色の光が煌々と辺りをおぼろげに照らしていた。

「うつ。ぐっ……」

自然と――頬に涙が流れた。

異世界に飛ばされたショックは、じつくりとだが実感するようになってきた。

そもそも、なぜ俺がこの世界にやってきたのかさえ覚えてないのだ。入口が分からなければ、出口だって分からない。つまり、俺はもとの世界に戻る可能性は、限りなく低いと言っても過言ではないのだ。

全てを失ったのだ。家族も友人も、はてまたは自分の存在意義さえも。

よく異世界トリップの物語の主人公は、現実とは違う世界にやってきても、なに喰わぬ顔で順応して、自分の持ち味を生かして活躍している。

あんなのクソくらえだ。

俺はそれほど精神力が強いやつでもないし、これといった特技もない普通の野郎。

所詮、異世界で生きていける奴らなど、《もとの世界に在った全て》をきっぱり切ることできる、おかしい奴らだけなのだ。普通だった俺のようにショックで、生き抜く気にすら起こらない。……いつそのこと、最初に倒れていたという森で、あのまま動物に喰われていた方が幸せだったかもしれないな。

「くそっ！ あのと二人も迷惑なことしやがって」

毛布を強く握りしめ、俺は助けてくれたこの家の住人を理不尽に恨んだ。

「あの。ジュンさん。起きていますか？」

突然の声に、俺は飛び上がるようにベットから体を起こした。部屋のランプを消してしまい気付くのが遅れたが、フウルが中に入ってきたのだ。

「お、起きてるけど、どうした？」

さっきまでの怒りはどこへやら、自分でも情けないくらいの間拔けた声だった。

「いえ。ちよつとお話がしたくて」

対するフウルは、やや緊張の入った口調で言った。

良かった。どうやらさっきの言葉は、フウルには聞こえていなかったようだ。

今さらかもしれないが、異世界にやってきたのにも関わらず、なぜか言語だけは普通の日本語で通じているのだ。ある意味、それは不幸中の幸いだったかもしれない。もしも言語まで通じなかったら、俺のショックはさらに大きくなっていただろう。

「あの、ジュンさんはいつまで、私の家にいるつもりですか？」

「……いや。俺もよく分からないんだ」

一応、事情はできる限りフウルたちに話しておいた。

まあ、話の半分は理解できていなかったようだけど、とりあえず『俺はこの国の人間じゃない』ことだけは、念を押して言うておいた。

「もし迷惑だったら、今すぐ出て行ってもいいんだぜ？」

「いえ！ 別にそうだったことはありません。どうせ、この家には私とパパしかいませんし、来客用の部屋のスペースだって十分に余っています」

「……母親はいないのか？」

俺の質問に、フウルは視線を下げて服の裾をぎゅっと握った。

「はい。私を産んだあと、すぐに亡くなりました。それからはず

つとパパと一緒にこの家で暮らしてきました。収入が少ないのでいろいろと苦労していますけど、今はこの通り——何とか頑張って暮らしています」

じゃあ、なんで俺を拾ったんだよ——と口が滑りそうになったが、寸前の所で俺は抑えた。そんな言葉を吐いてしまったら、多少の金を浪費しようとも俺を助けてくれた二人の善意を踏みにじることになってしまう。さっきまで、あれほど二人のことを恨んでいたのに、結局、俺は二人を恨みきることはできなかった。——所詮、二人を恨んだ理由もわけも分からず異世界に飛ばされてしまったことによる、捌け口でしかなかったのだ。

少し冷静になった。

他人と会話できることが、ここまで貴重だと思うなんて……。

「ありがとつな」

「はい？」

「わざわざ俺を助けてくれて、よ」

頭を搔いて恥ずかしさを紛らわしながら、俺はお礼を言った。

「いえいえ、全然構いませんよ」

フウルは、にっこりと笑みを浮かべた。

その真っ直ぐな笑顔を見ると、何だか余計に罪悪感が出てきてしまいそうだ。

「あの。これは私の勝手なんですけど——」

少し間を置いて、フウルは続けた。

「もし行く場所がなかったら、しばらく私の家に居てもいいんですよ？ この村はたいした観光名所や特産物はありませんが、自然に囲まれて、ゆったりとくつろげる場所です。気候も四季がはっきりとして非常に過ごしやすいですし、きっとジュンさんが気に入るところと間違いないです！……もっとも、最近は隣のスワンキー村との抗争が激しくなっていますので、ゆっくり過ごせるかどうかは、はっきり言えませんけど」

「まあ、その件についてはじっくり考えてみるよ」

かといって長く居る気もないのだが、俺はここで話題を変えてみた。

「なあ。フウルの親父さんって、もしかして戦争屋の仕事でもしているのか？」

「えっ？」

「そんな驚いたような顔するなよ……。さっきの二人の会話からして、親父さんも明日の抗争とやらに行くんだろ？ だったらそうなのかなと思って——」

「パパはそんな人じゃありません！」

突然のフウルの叫びに、俺は言葉を失ってしまふ。

部屋の空気が、一瞬にして凍りついたような気がした。

「あの優しいパパが、本気で戦えるとあなたは思っているんですか？ 食用の動物を殺すのにも、ためらってしまうあの人が！ 明日の抗争は普通のケンカではありません。立派な殺し合いです！ もし普通のケンカだったら、ここまで不安になりませんよ！」

「……………」

ここで、ようやくフウルは我に返ったようだ。彼女はしばらく口をパクパクさせながら俺を見つめていたが、やがて目から一粒の涙が、静かに流れた。

「ご、ごめんなさい……。つい大声で叫んでしまつて」

「いや。こっちも言い過ぎた。意外と深刻なんだな。その抗争とやらは」

「はい」

まるで悩みを打ち明けるかのように、フウルは事情を説明してくれた。

大まかにまとめると、何て事ない——。

隣の村との、土地をめぐる単純な抗争だった。

今までは、村の有志たちを集めて抗争に赴いていたようだが、最近になって抗争が激化してしまい、戦闘経験のないフウルの親父さんにまで、強制的に参加をすることになってしまったらしい。そし

て明日――。大規模な作戦を相手の村に仕掛けるために、今フウルの親父さんはその準備に明け暮れている。冷静に考えてみると、あの優しそうな親父さんが武器を持っている姿なんて、想像もできなかった。

「明日の抗争は、きっと多くの死傷者を出す大きな戦いになるでしょう。もし、明日の抗争でパパが死んじゃったら、私はどうすればいいんでしょうか？ ……イヤだ。それだけはイヤです。パパがいなくなったら……私、そうやって生きていけば……」

ついに体を大きく震わせて、フウルは黙ってしまった。

さつきは親父さんに対して気丈に会話をしていたけれど、やつぱりフウルも不安に押し潰されそうなんだろう。こんな重たすぎる話出会ったばかりの俺に明かすこと自体、普通ではあり得ないのだ。

「あの、本当にごめんなさい。ジュンさんに関係のない話をしてしまった」

「いや。先に質問したのは俺だから、気にするなっ」

「おかげで少し気分が良くなりました。ありがとうございます。それじゃあ、私はこれから夕食に取りかかりますので、失礼します」

軽い笑みを浮かべて、フウルは部屋を出ていった。

「気分が良くなりました――か」

再び誰もいなくなった部屋で俺はランプを消して、ぼんやりと天井を見上げる。

窓からの燭台以外、全てが黒に染まった部屋。何も見えない分、俺がつい頭に思い浮かべてしまうのは、先ほどの悲痛に満ちたフウルの顔。それを何とか振り払おうとするが、どうしても彼女の表情が頭から離れなかつた。

「くそ。気分悪い……」

ひとまず眠って全てを忘れようと、俺は決心した。

しかし、いつまで経っても眠ることができなかった。

かといって、こうやってベットに横になっていること以外、何をすればいいのか見当もつかなかった。

右も左も知らない異世界。成り行きに任せて行動に出たって、変化するのはせいぜい俺の体力くらいだ。フウルを励ますことや、ましてや抗争を止めるなんて、そんな物語じみたことが今の俺にできるはずもなかった。

しばらくの間、俺は頭を抱えながら、駄々をこねる赤ん坊のようにベットで暴れた。フラストレーションだけが一方的に溜まっていく。異世界に飛ばされたことによるショックは、少しずつだが——確実に、俺の理性を破壊しようとしていた。

……こんなとき、俺はいつもどうやってストレスを発散していたんだっけ？

現在に限らず、もとの世界でもストレスが溜まる時はよくあった。その時は、趣味である音楽をひたすら聞いたり歌ったりして、ストレスを発散させてきた。しかし、機械の見当たらないこの世界で、CDやMDといった音楽機器が存在するはずがない。

——音楽機器？

その単語が思い浮かんだ瞬間、俺の中である一つの記憶が蘇った。「そうだ、音楽プレイヤーだ……」

この世界にやってくる直前、俺は音楽プレイヤーを聞きながら家の周りを散歩していた。さすがに、この世界にやってきた直接の理由までは思い出せなかったが、つまり俺の記憶が正しければ、俺は《音楽プレイヤー》を聞きながら『この世界にやってきたはずだ。だが、俺が目覚めたとき、プレイヤーは手元になかった。』

無駄な行動かもしれない。だが特にやることがなかった今、試してみる価値はあった。

ランプを点けて、俺は早速この部屋の探索を始めた。あの性格の良い二人なら、そう易々と俺の持っていた音楽プレイヤーを森に置いていくはずがない。俺の手元にないということは、きっとこの部

屋に保管してあるはずだ。

そして奇跡が起こった。

棚の引き出しの中に、一つの物を見つけることができた。それは機械の見当たらないこの世界では、絶対に存在してはいけな物。

俺の音楽プレイヤーだった。

「いよっしゃっ！」

ついでにイヤホンも装着されたままだった。電源を押してみると何事もなくプレイヤーは作動する。この世界にやってきてまだそんなに時間は経っていないけど、音楽プレイヤーの画面が放つ電子的な光に、俺はわずかに懐かしい気分浸ってしまった。

俺が元の世界にいたことを証明できる、唯一の物。

——懐かしい気分に加え、少し心も軽くなったような気がした。

俺は早速イヤホンを耳につけて、一度は諦めかけた音楽の世界へと入る。あまりの嬉しさに、感極まって涙がこぼれそうだった。：

しかし、この音楽の時間も、幸運の神様が与えてくれたわずかな時間だということは、どうしても認めなければいけないようだ。

この音楽プレイヤーは、コンセントの必要な充電式。

もちろんコンセントのないこの世界では、新たに充電することは不可能。つまり、今残っている電池の量しか音楽を聞くことができないのだ。

現在の電池の残量は四分の一ほど。と言うことは、あと一時間弱くらいで、俺は一生、もとの世界の音楽を聞けなくなってしまうのだ。

残量のケージを見たときから、それは重々承知していた。

「はっ。そんなのクソくらえだ」

だが、気が付けば——俺は残量を気にしないで、音楽の世界に浸っていた。最初は適当に選んだ曲を聞いていたが、やはり残量も気になるので、次第にお気に入りの曲ばかりを聞くようになった。気分も良くなってきたので、夜でも構わず大声で歌った。

どうせ、この世界で長く生きていくつもりはない。俺の全ては、

もとの世界を追い出された時からすでに終わっている。だったら最後くらいは思いっきり聞いて、思いっきり歌った方が踏ん切りがつけられるような気がしたのだ。節約なんてしたって、どうせ充電式電池は勝手に減っていく。今日は、別れの気持ちを込めての熱唱だった。

歌い始めて一時間くらい経った時。

音楽プレイヤーは、ついにその役目を終えてしまった。

「まっ、最後に聞けて良かったよ」

イヤホンを外して、俺はプレイヤーをポケットに入れる。さっきまでは気持ちがあればほど沈んでいたのに、思いっきり歌うことができ、今は多少すっきりしている。

これならよく眠れそうだな——。と、思いながら俺はベットになる。

フウルたちには悪いけど、明日になったらこの村を出よう。すぐにくたばると思うけど、体力の続く限り、この世界を適当に歩き回ってみるのも悪くない最期だ。

こうして眠りに入ろうとしたその時、ふと部屋のドアが開かれた。体を起こしてみると、フウルが中に入ってきたのだ。

「どうした、フウル？」

しかし、フウルは何も返事しない。

暗いので表情までは確認できなかったが、微妙に体が震えているのだけは分かった。

「あ、あの。ジュンさん——」

俺はひとまずランプの火を点けてみる。

「今の《それ》。何ですか？」

フウルの顔が鮮明に映った瞬間、俺は驚いた。フウルの目元がなぜか、真っ赤に腫れ上がっていたのだ。まるで、涙を流してしまった後のソレのように。

「……フウル。なんだよ《それ》って」

「ジュンさんが、さっきまで言葉を述べていた《あれ》ですよ！

よく分かりませんが、《あれ》を聞いて、わたし……わたし。うつ……」

フウルは大粒の涙を流して、俺の手を握ってきた。親父さんの話をしている時でも、あれだけ気丈に振る舞っていたフウルが、今やここまで感情を剥き出しにして泣いている。

何が何だかよく分からなかった。

フウルが号泣した原因は、どうやら俺にありそうだ。だが、俺がさっきまでやっていた事と言えば、フウルと話したり、音楽を聞いたり歌ったりしてただけで――。

歌？

「フウル。もしかして、俺の『歌』を聞いて涙を流しているのか？」

「ウタ？ さっきまでジュンさんがやっていた事は『ウタ』と呼ぶのですか？」

「おいおい。まさかお前、歌を知らないのか……？」

「……『ウタ』。さっきジュンさんがやっていたのは『ウタ』と言うのですね。――どうしてでしょう？ 夕食中にジュンさんの部屋から『ウタ』が聞こえてきまして、最初は驚きましたけど、どんどん聞いているうちに、不思議と涙が出てきてしまいました。おかしいですよ。あなたの『ウタ』は、本や詩に出てくるごく普通の言葉の羅列ですが、どうしてこんなに私の心に響いてくるのでしょうか？ 私にもよく分かりません。でも、私は今……心の底からジュンさんの『ウタ』に感動しているのです！ それだけは本当のことなのです！」

そしてフウルは、俺の手を自身の額に乗せてきた。俺の歌に感動――？ あまりのベタ褒めに、俺はむしろ心の底から引いてしまっているんだけど。

「他にも、その『ウタ』はありますか？」

「えっ……。まあ、覚えている歌なら五百くらいはあるけど」

すごい！ と、フウルはさらに驚いたような顔をした。

そして、俺の手をさらに強く握ってくる。

「差し支えなければ、他にもその『ウタ』を私に聞かせてもらえないでしょうか？」

「でも俺、そんな歌うまくないし……」

「お願いです。聞かせてください！」

多分、何を言ってもフウルは引き下がらないと思ったので、仕方なく俺は彼女の要望に応えてやることにした。音楽プレイヤーは二度と動かなくなってしまったが、頭で覚えている曲ならまだ大量にある。

俺はフウルに向けて五曲歌った。歌詞も空気を読んで、重みのある内容を中心に。ギターも楽器もない——歌だけの披露だったが、曲を歌い終わっても、フウルはいつまでも泣きながら俺の手を握り続けていた。

俺も薄々と感じていたことなんだが、この世界にはどうも『音楽』という概念が無いらしい。まだこの村の人に限ってなので、はつきりと断定できないのだが、この世界の人は歌というものを知らないのだ。歌を知らないのなら、当然それを弾く楽器も存在しない。

つまり、この世界の人にとって歌を聞くということは、未知なるものを聞いていると同じなのだ。……まあ、それでも歌を聞いて感動するとは、あまりに意外だったけど。

そして現在。

恥ずかしくも俺は、再び自分の歌を披露していた。

場所は村の大広場の中心——これから村の抗争に向かう人たちの目の前で。

昨晚、作戦会議を終わらせて帰ってきた親父さんに、フウルが俺の歌のことを告げると、その日の晩のうちに噂が村中に爆発的に広がってしまい、そして現在に至るのだ。

歌う曲は、場の空気を読んで比較的穏やかな曲を選んでみた。

始めて聞く『歌』の存在に、最初こそは村の人たちも驚いていた。だが、時間が経っていくうちにあまりの感動からか涙を流す人が続出し、おまけに周囲にいた抗争に関係のない人たちにまで涙が伝染してしまい、最終的には集まった人のうちの八割が、号泣してしまふという事態にまでなってしまった。

個人的には、毎日聞いていた曲をただ歌っているだけなのに……。その反面、純粹に歌を受け入れてくれる村の人たちを見て、ちよつと嬉しい気分にもなった。

「ありがとうジュンくん。君の『ウタ』のおかげで、弱気にならず一生懸命戦ってみる気になったよ。帰りを待っているフウルのためにも、絶対に抗争に勝ってみせるからね」

歌の終了後。フウルの親父さんは涙を拭いながら、力強くそう言った。

「そんなオーバーな……。俺はただ好きな曲を歌っただけですって」「いやいや。ジュンくんはすごい。ジュンくんの『ウタ』には、僕たちに大きなパワーを与えてくれる力がある。君自身はそう思っていないくても、僕たちにとってジュンくんの『ウタ』は、神様が僕たちを励ましているように聞こえてくるのさ」

褒め殺しもいい所だ……。

親父さんに目を合わせられないくらい、俺は顔を赤くしてしまった。

「俺にできることはこれだけです。フウルのためにも、絶対に帰ってきてください」

「ああ。言うまでもないさ！」

親父さんは俺の手を強く握って、そう答えてくれた。

こうして村の抗争メンバーは、いざ戦場へと赴いたのであった。

この瞬間、俺はある一つの決心をした。もしもこの抗争に勝利して、フウルの親父さんも生きて帰ってきたら、村の人たちに向けて

お祝いの曲をいっぱい歌ってやろうと――。

まだ右も左も知らないこの異世界。

ここで初めて、俺はこの世界の事をもっと知りたくなってしまった。

（後書き）

異世界迷い込みにしましては、ファンタジー要素の薄い短編になりました。『歌』という要素を入れましたのも、完全に音楽好きの作者の趣味です。ご意見、ご感想、アドバイスはいつでも歓迎です。謹んで返信させていただきます。

【執筆完了】 2008年 8月15日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8853e/>

異世界のうた

2010年10月8日15時07分発行